



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	建築家マックス・ヒンデルMAX HINDERの経歴について
Author(s)	角, 幸博; 越野, 武
Citation	北海道大學工學部研究報告, 83, 15-24
Issue Date	1977-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/41397
Type	departmental bulletin paper
File Information	83_15-24.pdf



建築家マックス・ヒンデル MAX HINDER の経歴について

角 幸 博* 越 野 武*

(昭和51年9月30日受理)

A Biography of Max Hinder, Architect

Yukihiro KADO and Takeshi KOSHINO

(Received September 30, 1976)

Abstract

Max Hinder (1887-1963) is remembered as the Swiss architect who designed two missionary schools, the Fuji (1924) and the Hokusei (1929), and the St. Franciscan monastery (1925) in Sapporo. But we have known nothing about his career beyond that.

In this paper, the authors try to throw light on the biography of Max Hinder.

He was born in Zürich on January 20th, 1887. In 1924, after pursuing his career as an architect in Switzerland, Germany, Austria etc, he arrived in Japan.

He resided in Sapporo for three years till 1927, where he worked on numerous dwellings including his own, two mountain huts, a cathedral in Niigata (1927) and others buildings besides those mentioned above.

He moved to Yokohama in 1927 and continued his work as an architect until 1940, when he returned to Germany.

During these thirteen years, he designed the Jochi University, Tokyo (1931), the Saint Mary Hospital, Tokyo (1931) and others. He closed his earthly pilgrimage in Regen, Germany in 1963.

マックス・ヒンデル Max Hinder (1887-1963) は、大正末期から昭和初期にかけて札幌市に滞在したスイス人建築家であり、同市藤学園や北星学園の校舎・寄宿舎などの設計者として記憶されていた。しかし、その記憶は一部の関係者の間に限られ、3年余の札幌市滞在後、横浜市に移り、あわせて16年間、在日建築家として活動したことは、ほとんど忘れられていたといっている。従って、住宅、ヒュッテ、学校、病院、宗教建築など、その広範な作品も全体として知られることはなかった。

この時期は、札幌の建築界に限ってみても、ヒンデルや田上義也¹⁾ら、いわば職能に自覚的な「建築家」がはじめて登場した近代建築の創成期として、重視されなければならない。さらに現在、全国の大正・昭和前期建築について、あらためて史的研究の端緒が開かれようとしており、この期の忘れられた建築家のひとりとして、ヒンデルの業績を明らかにしておくことも必要であろう。

さいわいヒンデルと交流をもった何人かの人々は存命しておられ、いくつかの作品や図面・仕

* 建築工学科 建築計画学第2講座

様書などの一部も発見することができた。

史料として、『北星女学校校舎設計図』（北星学園所蔵）『同寄宿舎設計図』（北星学園所蔵）『上智大学設計図』（上智大学所蔵）『山崎邸設計図』（山崎泰雄氏所蔵）『北海道帝国大学第2備外国人教師官舎設計図』（北海道大学所蔵）『ヘルヴェチアヒュッテの建設』（山崎春雄：山とスキー 第78号，第79号。1928）『秩父宮殿下ヒュッテの竣工に当って』（小川玄一：山とスキー 第89号。1929）『雪國に相恵しい建築』（北海タイムス 1925.10）『新しく家を建てる人々へ』（マックス・ヒンデル：北海タイムス 1925.12）のほか，旧写真21葉を新たに収集することができた。

さらに当時の関係者からの聴き取りを中心に，チューリッヒ在の子息ハンス・ヒンデル Hans Hinder²⁾氏やヒンデルの友人アーノルド・グブラー Arnold Gubler³⁾氏らとの往復書簡によって，より詳細な経歴と新たにいくつかの作品を知ることができた。特に，多くの住宅作品や，札幌以外の東京，新潟などに実在する作品の多くは，この小論によって明らかにすることができたものである。

在日中の略歴などの概要については，すでに報告したが⁴⁾，本稿ではヒンデルの経歴と年譜に関し，詳細に報告しておきたい。

1. 経 歴

マックス・ヒンデル Max Hinder は，1887年1月20日チューリッヒで生まれた。

1897年チューリッヒの小学校へ入学し，1903年16歳で，下級ギムナジウムを終えた。終了後，チューリッヒの Bischef & Wandele，クロン Chilon の Schmidt & Rosset⁵⁾のもとで，4年間，製図の訓練 Bauzeichnerlehre を受けた⁶⁾。

当時建築家をめざす者は，一般的には，まず最初の何年間か Pauzeichnerlehre を務め，その後多くの事務所を巡って技術を習得していく⁷⁾といった過程をたどった。著名な建築家のもとには，多くの人間が集まっており，競技設計 Wettbewerbe に参加するなどして腕をみがいたのである。競技設計で成功した者は，独立して，“Architekt”と自称したのであり，建築家として成功するためには，必ずしも学歴は必要なかったようである。この名称には，明確な基準はなく，設計業務に携わる者であればそう呼称されることが多く⁸⁾，状況としては現在も同様であろう。

これに対して，“Diplom-Architekt”という称号がある。大学で建築教育 Architekturstudium を10-12 semesters 終了して，卒業試験 Diplom-Abschlußprüfung に合格する義務をもつものである。ヒンデルの図面には，単に，“Architekt Max Hinder”または「建築家マックス・ヒンデル」と署名されている場合が多く，大学教育を受けたことも知られていないなどから，前者の過程を経て建築家として独立したものであろう。

1907年から14年に兵役につくまでの7年間は，さらに各地の事務所を巡る修業時代であった。チューリッヒを皮切りに，ロールシャッハ Rorschach，アーラウ Aarau，クルル Chur，サン・モリッツ St. Moritz，ミュンヘン，ベルリン，パリ，ブリュッセルなど，各地を放浪し，多くの競技設計にも成功することができた⁹⁾という。ドイツ工作連盟の結成（1907）やドイツの建築家 P. ペーレンスの活躍，ベルリンでの F. L. ライトの最初の作品集の出版（1910）などのあった時代である。

この間に，1909年子息ハンス・ヒンデルが誕生してまもなく，夫人が他界した。

1914年第1次世界大戦が始まり，2年間スイス軍で兵役を務めたが¹⁰⁾，この時に受けた顔の銃剣傷が原因で，札幌市滞在中は病気がちの生活を送ることになるのである。

1916年チューリッヒで設計事務所を開設した。作品としてはエブリ Aebli 邸などがある¹¹⁾。

翌年ウィーンへ移って、4年間をすごし、銀行などを手がけた¹²⁾。ウィーンの巨匠オットー・ワグナーに師事した¹³⁾といわれ、その可能性も否定するわけにはいかないが、ワグナーは1918年4月に他界しているのので、師事したとしても短期間であったろう。

1921年から2年間チロル地方に滞在し、ランデック Landeck 近郊のグリン Grins に独立住宅を設計したり、“*Liceum Alpinum*”のためのプロジェクトを発表するなどした。

1924年1月義弟ハンス・コーラー Hans Koller¹⁴⁾ 夫妻のすすめもあって、北海道に永住する決心で、アニー Anny 夫人を伴ないマルセイユから乗船した。日本へ到着したのは同年3月、関東大震災後の混乱期であった。この船には、後の施主柳壮一夫妻も偶然同乗していた¹⁵⁾という。

在札期間中、北大教授の柳壮一、山崎春雄、大野精七、アーノルド・グブラーらと交わり、病気がちにもかかわらず、短期間のうちに、札幌市を中心に精力的な設計活動をおこなった。

来札当初、コーラー家に身をよせたが、その年札幌市北11条東1丁目に自邸「東光園 円い家」¹⁶⁾ (図-1) と呼ぶ円形プラン (正確には16角形プランというべきか) の住宅を建設し、事務所も開設した。札幌市における設計活動の第1歩である。屋根頂部に風見をつけ、外壁がこけら葺のこの住宅は、当時大いに話題となり、新聞にもとりあげられた¹⁷⁾。ここでは、日本人のドラフトマン、書生、女中を雇用していたが、このドラフトマンが、北星女学校寄宿舎設計図に事務所名とともに捺印のある「楽間」であろうか。

同年札幌藤高等女学校 (図-2) を設計、翌1925年には「円い家」のすぐ北側に第2番目の自邸 (図-3) を建設した。同年来札したグブラーに「円い家」を売却したためであるが、急場しのぎのもので、ヒンデル自身満足できる作品ではなかったらしい¹⁸⁾。この住宅は、竣工時の外観をすっかり変えてはいるが、現在でも残されている。

この年、柳邸 (図-4)、大野邸、山崎邸、林邸 (図-5) など一連の住宅作品が続いた。イチイなどの丸太杭9尺程度のものを10何本も地面に打ち込むといった慎重な構造的配慮や、外壁をこけら葺や亜鉛鉄板張りにするなどの処理、日本独自の引き戸や引き窓の採用などが共通した特



図-1 東光園円い家
左より女中、ドラフトマン、書生、妻
アニー、ヒンデル、友人 Mukai



図-2 札幌藤高等女学校 (被災前)



図-3 ヒンデル自邸



図-4 柳 邸



図-5 林 邸



図-6 北星女学校女教師館



図-7 新潟カトリック教会

徴であった。

同 25 年には、ほかに聖フランシスコ修道院や北海道帝国大学第 2 備外国人教師官舎基本設計などがある。

設計・監理に言葉の障害のあったことは想像に難くないが、「札幌の材料を思いがけぬことに使うので、その通の人はおどろいた」¹⁹⁾ことなど、大工との間の意思疎通にも苦労が伴ったことであろう。

気短かな性格であったというのが、建築家としての使命感と固い信念を持っていたことは、小論『新らしく家を建てる人々へ』²⁰⁾からもうかがうことができる。建築家の職能の未確立、無理解であった当時の状況をふまえると、「建築に関する計画及監督は建築家に一任すべきである」と結論し、住宅を建てる際の施主の心構えや、「建築家は、医師・裁判官・社会学者と同一である」「医師と同様建築家を信頼せよ」「真の建築家は又金銭さえ貰えば如何なる要求にも応ずる奴僕ではない」など建築家の職能について一般読者への啓蒙に務めていることは、大変興味深い。

建築設計についても、建築には樹木をとり入れることが建築の生命であることや、日本の住宅は南国風であり、北海道の冬には適さないため、屋根を簡単に急傾斜のものとし、日を南から入れるようにするなど、北国の設計条件を入れた北海道向きの建築をつくるべきであることを唱えている。鬼門などの家相を戒める一方で、当時の日本建築界における「コンクリートの函が頻に



図-8 ヘルヴェチア・ヒュッテ

建つ」²¹⁾ インターナショナルスタイルへの傾向を憂い、「何故日本建築のいい所をとり入れて日本独得の建築を造らないか」²²⁾と疑問を投げかけているのである。

1926年、北星女学校寄宿舎・同女教師館(図-6)、パラダイス・ヒュッテの作品がある。このヒュッテは北大スキー部15周年事業として計画されたもので、ヒンデルも無償で協力した。日本で初めてのスイス式山小屋といわれている²³⁾。

翌27年、天使の聖母トラピスチヌ修道院(函館市湯川)、新潟カトリック教会(図-7)、日本基督札幌教会案などの宗教建築や札幌藤高等女学校寄宿舎、ヘルヴェチア・ヒュッテ(図-8)を中心に、上智大学の基本設計もはじまった。

日本基督札幌教会は、北大農学部林学科教授新島善直を通じて依頼されたもので、A-1版くらいの額1枚に透視図を描いたものであった。木造1階建切妻屋根の簡単なものであったらしいが²⁴⁾、設計費が2,000円ということで教会側が難色を示し、北大水産専門部主事佐々茂雄の紹介で、若い田上義也が設計をひきうけたものである。

ヘルヴェチア・ヒュッテは、ヒンデルとグブラーとの共同出資により、北大山岳部に寄贈されたものであった。ヘルヴェチア Helvetia は、両者の命名であるが、スイスの古名であり、スイスを代表する女神の名である²⁵⁾。8坪の小さな小屋ではあったが、札幌の事務所における最後の作品であり、「王宮を建てたよりもヘルヴェチアヒュッテの建設が自分には深い喜びであった」²⁶⁾と述べるほどのものであった。

この年にはほかに、1926年7月25日に全世界の連盟国の建築家に対して呼びかけられたジュネーブ国際連盟会館競技設計への応募案(図-9, 10)が残されている。

同27年10月には、横浜市へ移転し、本牧満坂で設計事務所を開設した。北海道永住の志を捨て、帰国への第1歩として移転を決心した動機には、'25年1月29日のコーラーの死去、リスリー・コーラー未亡人のスイス帰国などもあげられよう。

横浜の事務所では、札幌の北星女学校校舎(1929)、秩父宮殿下ヒュッテ(1928)や東京の上智大学(1931)、聖母病院(1931)などの作品がうまれた。

設計活動のほか、ドイツ東アジア研究協会(OAG: Deutsche Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens)の委員会メンバーとしても活動し、OAG 便り Nachrichten der OAG にもしばしば名前がみられたという²⁷⁾。



図-9 国際連盟会館案

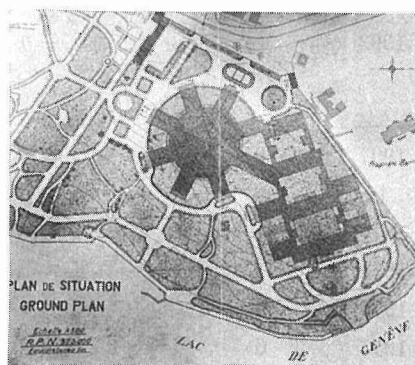


図-10 国際連盟会館案

1936年4月1日 OAG の委員会を脱退し、第2次世界大戦のさしせまった39年、最後のヘルヴェチア行のために来札し、1940年、戦争のまっただ中のドイツへと出発したのである。

ドイツ、バイエルン地方レーゲン Regen を最後の郷里と決め、1年間実業学校の教師を務めた。1963年1月末、レーゲンで76歳の生涯を閉じた²²⁾。

2. 年 譜

ここでは、ヒンデルの作品と経歴、関連事項について年代順にあげた。文中ゴシックの作品は現存するものである。

- | | | |
|--------------|-------|---|
| 1887 (明治 20) | 1.20 | チューリッヒで誕生。 |
| 1893 (明治 26) | | チューリッヒの小学校へ入学。 |
| 1903 (明治 36) | | チューリッヒの下級ギムナジウムを修了後、クロンの Schmidt & Rosset およびチューリッヒの Bischeff & Wandele のもとで製図訓練をうける。 |
| 1907 (明治 40) | | チューリッヒ、ロールシャッハ、アーラウ、クール、サン・モリッツ、ミュンヘン、ベルリン、パリ、ブリュッセルの各事務所を巡る。 |
| | | |
| 1914 (大正 3) | | 多くの競技設計で成功。 |
| 1914 (大正 3) | | スイス軍にて兵役。1916 まで。 |
| 1916 (大正 5) | | チューリッヒにて設計事務所開設。Aebli 邸建設。 |
| 1917 (大正 6) | | ウィーンに滞在、1921 まで。 |
| 1921 (大正 10) | | オーストリア、チロル地方に滞在。ランデック近郊グリンの独立住宅。“ <i>Liceum Alpinum</i> ” のためのプロジェクト。 |
| 1923 (大正 12) | | |
| 1924 (大正 13) | 1.— | ヨーロッパ出発。3月日本到着。 |
| | 9.28 | 札幌藤高等女学校（札幌市北16西2）上棟式。施工、三浦建築工務所（三浦才三）。’32.2.2 一部焼失。3.5 復旧工事ほぼ竣工。 |
| | この年 | 自邸「東光園円い家」（札幌市北11東1）。1967.2.—取壊し。 |
| 1925 (大正 14) | 11.15 | 山崎邸（札幌市北2西23）。棟梁、佐々木某。 |
| | | 山崎邸のためにイス、テーブルのデザイン。 |
| | 12.13 | 『新らしく家を建てる人々へ』と題し、北海タイムス紙に5回にわたり連載、12.20 まで。 |
| | 12.20 | 北海道帝国大学第2備外国人教師官舎（札幌北11西3）。’25.8.8 起工。’66.6.15 取壊し。 |
| | 夏 | 大野邸（札幌市北12東2）。監理、林清。施工、沖津組。 |
| | 秋 | 聖フランシスコ修道院（現天使幼稚園、札幌市北11東2）。施工、三浦建築工務所。 |
| | この年 | 自邸（札幌市北11東1）。柳邸（札幌市北4西16）。棟梁、佐々木某。林邸（札幌市）。 |
| 1926 (大正 15) | 11. 2 | パラダイス・ヒュッテ（札幌市手稲）。’26.7.4 起工。 |
| | 12.21 | 北星女学校寄宿舎、同女教師館（札幌市南5西17）ほぼ竣工。施工、松川三浦工務所。’26.7.10 定礎式。’27.1.15 寄宿舎落成式移転献堂式。 |
| 1927 (昭和 2) | 7. 5 | 天使の聖母トラピスチヌ修道院（函館市上湯川）竣工献堂式。 |

- 9.13 ヘルヴェチア・ヒュッテ（札幌市）。請負、水本小判治。大工、田頭。
- 9.18 新潟カトリック教会（新潟市東大畑）献堂式。施工、コンクリート工業（株）。
- 9.一 上智大学基本案。
10. 1 札幌藤高等女学校寄宿舎（札幌市北16西3）。施工、松川三浦工務所。'63.9.—取壊し。
- 10.一 横浜市本政満坂253へ移転、事務所開設。
- この年 日本基督札幌教会案。ジュネーブ国際連盟会館競技設計案。
- 1928（昭和 3） 4.一 北星女学校校舎案。
- 12.10 秩父宮殿下ヒュッテ（現空沼小屋、札幌市）。施工、伊藤組。
- 1929（昭和 4） 12. 2 北星女学校校舎（札幌市南5西17）工事終了式。施工、松浦組（松浦周太郎）。5.28起工式。8.14上棟式。'30. 1.22新築落成献堂式。'63. 12.4焼失。
- 1931（昭和 6） 4.20 聖母病院（旧東京府豊多摩郡落合町、東京都新宿区中落合）。請負、宮内初太郎。'30.4.20起工。
- この年 上智大学（東京都千代田区紀尾井町）。
- 1934（昭和 9） 2.20 聖母病院第2期増築工事。請負、山村力松。'33.11.30起工。
- 4.30 聖母病院看護婦室第2期工事。請負、山村力松、松本敏之。1.30起工。
- 1936（昭和11） 4. 1 OAG (Deutsche Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens) の委員会脱退。
- 1939（昭和14） 8. 5 札幌にてヘルヴェチア行。
- 1940（昭和15） ドイツへ出発。バイエルン地方レーゲンに滞在。実業学校教師を1年間務める。
- 1963（昭和38） 1.一 レーゲンにて76歳で死去。

3. 資 料

ここでは、1925年の北海タイムス紙に連載されたヒンデルの小論を収録しておく。

ヒンデル自身が残した論としては、現在のところ、唯一のものであり、彼の建築観を知る上で有力な手がかかるものであろう。一般読者に、建築家の職能について力説した点など、当時の状況とあわせて興味深い。訳者は、北大教授山崎春雄である。

かな使い、句読点などは原文によったが、漢字は、旧字体をできるだけ新字体とした。

新らしく家を建てる人々へ

建築に関する計画と監督は建築家にまかせよ

建築家 マックス ヒンデル

（一）12月13日

茲に新に家を建んとする人ありとします。彼は先新聞の広告欄に紹介さるる建築に関する新改良、安価で理想的といふ様な事物に著るしく興味を持つ様になります。並米利加の建築雑誌、新式住宅建築法、組立家屋、郊外住宅、建築上の特許の物件に関する書籍を手当り次第に買込む。一方には日夜設計に次ぐに又設計、今日は妻君が台所の坪数を余分に獲得する。明日は主人が他の室を犠牲にしても、成金然たる客間とかファイアプレッスに建込書棚付きの書齋を計画する。新らしく家を建てた友人達を歴訪し始める事もお定まりの過程であります。どの友人の家が最も気に入ったかといふに到る所新案の工夫を疑らした家かさもなくばたまたま其処で最も居心地よく時を過した家といふ事になります。其間に時日は容赦なく推移して予定の建築着手期が目前に迫

って来る。所が肝心の具体的設計は未だ出来上らぬ、勢ひ己むを得ずして其所に一人の建築請負業者が招かれるといふ事になって来ます。請負業者は其の配下の建築師に命じて設計を作らせますが其速かなる事は目下の事情として建築主に取っても便利至極の手取り早さであります。平面図はいづれ何かのコピーかさ無くとも時間不足の結果充分なる考案を凝らしたもので無い事は理の当然です。外観図は矢張り何かの原図をごまかしたものでなくば花嫁然と飾り立てたものでせう。やがて活版刷の契約書に調印がすみ一二の三といふ調子で建築はどしどし進行します。新宅に転する人の本当の気持はまづ面喰ひ半分の諦め半分といふべき心持です。家の利益の方は大部分請負の人の方に行ってしまった外に予期しなかった**不利益**がボツボツ目に付いて来ます。唯一の慰めは先の家は今度の家程立派でなかったといふ位の事です。不幸に新宅の住心地がどうしても悪いと言ふ場合にはおそかれ早かれ終には改築といふ事に成るのです。所で此の人は其の家が間取りの設計をもっと上手にしたらもっと勝手がよくなり立派にもなったろうといふ事は考へるかも知れませんが、もっと**上等**の家がもっと安価に出来るだらふといふ事は夢にも思ひ浮べないに違ひありません。所が或日此の人は他の家が自分のよりも広くて普譜も上等でしかも値段が安く作られたといふ事実を知るでせう。而して其時彼は斯様な家こそ一の専門家、即ち請負業者の奴僕にもあらぬ独立の建築家に依って作られたものなる事を併せて知るでせう。尤も建築家は建築主よりも相当の報酬を受けては居ます。然し彼は其と共に建築家の報酬といふものは建築家其人の誠意あり周到なる個人的研究により又工事の正直なる監督によって建築主の為に節約し得たる額に比すれば誠に些細のものたる事も併せ聞くでせう。

(二) 12月14日

真の事実は次の様なものであると思ひます。建築が一つの専門的職業である事はたとへば時計師や裁縫師のそれと同様の専心的習練を必要とする外に一面献身的の天職としての努力を要求することは例へば医師の場合と少しも相違ないのであります。建築家は其の社会的地位よりいへば医師、裁判官、社会学者と全然同一の地位を占むるもので其芸術的及び技術的方面を別にして之れ等の人々と全然同一なる社会的任務の下に働くのであります。医学者がいかに疾病の原因に対し衛生上の戦ひに奮するとも若一方に良心の癱痺せる拝金者が依然として**不健康**なる密集バラックや裏長屋を建つとせば如何です。社会学者が如何に良き成果を挙ぐべく努力したとてあらゆる経済生活の源泉たる家庭の建築が我利一方の請負業者や投機者の掌中にありとせば如何です。建築依頼者の利害と、出来るだけ利益を見んとする請負業者の利害との間の正当なる歩み寄りとは独立の公平なる判官あることなくして果して出来得るでせうか。建築家は茲に衛生的及び経済的両方面の利害関係を併せて考慮し、自由なる判官として一般社会と建築依頼者と、又は建築主と請負業者との間に立つのであります。然し又**建築家**には充分なる権威が賦与されねばなりません。すべて建築に関する計画と監督とは之を建築家の手に委託せねばなりません。

第一、建築依頼者は自己の意見を定めるよりも雑誌や書物の切抜きを拵へるよりも先にまづ建築に必要な諸条件の詳しい箇条書きを文字にして記述したものと自分達の生活様式や習慣、夫に関する意見を包隠さずに発表する意志を以て充分早く建築家を訪問すべきである。

(三) 12月17日

第二、建築家を訪問する人の気持は丁度医師を訪るると同であるべき筈です。商店に買物に入る積りではいけません。何故かといふに建築家の作品は決して出来合品として作らるるものでなく従って**材木**か何かの様にオイソレといって販売出来るものではありません。其人を信頼せよといふ事は建築家の場合と医師の場合と全く同であつて共にそれが成功の一条条件であります。何事に依らず自分の方が余計知っていると思ひ込んで居る人間に掛つては医師も建築家も匙を投げるより外仕方ありません。第三、建築家は同時に請負者たる事を得ません。高等の学歴ある真の建築家に向ひ其中立的地位、其崇高なる判官の椅子を捨て職人と社会の中間に巣を食ふ上前取の商売と交換せよとは到底忍ぶべからざる恥辱です。又一方には大工や左官や図工等が自ら恣に建築家と名乗ることも許し難き僭越の沙汰です。又如何に最高の学歴あり、真の才能ある専門家と雖も自ら請負業者を兼ね居る限りそれに建築家の称号を冠せしむるわけには行きません。建築家といふ名称は本来、医師、弁護士等のその如く法律を以て保障さるべき性質のものです。

第四、正統の日本風住宅を建てんとする人には外国の建築家は何の交渉を持ちません。反之西洋風住宅の設計は恐らく西洋の建築家がこれをよくするだらうと思ひます。

第五、樺太には露西亞風又は諾威風の家屋が適し台湾建築は適しません。札幌と東京の建築家に向つて双方の氣候の関係を共によく理解せよとは無理です。南国のものは南国の家を建て、寒い北の国に人と為つたものは北国の家を建つるに適して居る筈です。

第六、最良の建築師だとして魔術師ではありません。物が良ければ値段も高いのは当然です。バラック建築の費用を超過せずに宮殿の設計をせよと建築師に注文する様なことは不可能です。

第七、真の建築家は又金銭さえ貰へば如何なる要求にも応ずる奴僕ではありません。

(五)²⁹⁾ 12月19日

我々が一篇の詩に一幅の書に、一瓶の花に一個の火鉢に、一軒の家に対していふべからざる美を感じる。此れが芸術の爲す所であり、我々は此の感情が、我々の心を高尚にすることを直覺し又は予感する所に美の力があるのです。我々が人の風貌に接して其の品性を知る事を得ると同様に家も又其顔貌即ち外観に於て正しくそ

の品性を現します。貴君は貴君の家が何等の品格も示さず又は劣等の品性を表現することを忍ばれますか。或は又貴君の家がすべての路行く人の喜びであり品性向上の一助たる方が望ましくはありませんか。比問題こそ普通あまり論議こそされませんが正しく建築上の一問題であります。而も通例事々しく論ぜられる所の費用や坪数の問題に比して同様に重要なものでなければなりません。此の建築上の問題を解決する為には請負人や大工の打算より超然たる自由の建築家を措いて他に人は無いのです。勿論多くの請負業者の内には建築家と同様正直なる人もあります。然し乍ら此れ等の人々とても営業上利益の採算を余儀なくされて居ます。又彼等は実際他の工事で被ったり或は彼るべき損失の補填といふ事も考へに入れねばならぬ場合もあることを知らねばなりません。之に反し建築家は一定の報酬を受けるのみなる故に損害の懸念も無く利得の欲もありません。従って全く利害関係より超越したる自由の地位にあるのです。世上の事すべて各人其の繩張を守るべきもので請負人は工事の組織化に気を配り利益の夢想や損失の懸念に心を悩ますがよく建築家は思想の表現、与へられた内容を盛る器の具体化に心を砕き、計画が建築技術上の経験に照し又価格に比して正当に実現するるか、一般社会的関係、即ち衛生的、道徳的、又美的条件が果して正当に顧慮せられあるやに精神を集注すれば足りるのです。

上に述べられる各項は単に個人住宅の場合のみならず、すべての公共建築、学校、教会、都市、会社、政府其他あらゆる団体の建築に於て同様に適合します。私の欧州に於ける在米の経験より推すに公共建築に於て最善の方法は其が一人の首脳者に依つて支配されることです。三人の建築委員会は数に於て充分です。之よりも多人数の場合は必ず成績が不良となります。

(完) 12月29日

若し各委員の其本分が建築家に対し建築本来の大目的に関し又は使用上の要求に関して詳細なる説明を与ふるに止まるものになることを忘れて、各自勝手に建築家に命令を下さんとするが如きに至っては百害あって一利なきことを断言します。私は茲に確心と熱慮とを以て一利なしと主張する理由を持って居ます。奥国に於ける旧帝政時代に於ける政府の建築は私人建築に比し品質に於て約十割不良に価格に於て五割高に付いた事は確定の事実であったのです。所が戦後共和国となり猫も杓子も国の貽に容喙する様になってからは品質に於て約廿五割、価格に於て十割の不利を来す様になったのです。之も確に証明せられた事実であります。

他の国でも同様であるか私は明言出来ませんが聞く所によれば他のすべての欧州各国の政府の建築に対しては矢張り同様の非難があり、欧州以外の国々に於ても種々なる類以の数字を目撃して居ます。故に私が一般に公共建築の場合に於て建築委員の数が多ければ多しだけ不利であると主張するのは当を得たものと考へます。或はまた私の説が誤つて居るでせうか。幸に私は茲に一の明白なる例証を挙げることが出来ます。此の例証の教ふる所は一の建築団体が唯一の首脳者に依つて代表されたる為に、而して此の首脳者が其の団体の真に必要なものの何物なるかを明白に認識し、而して比事業を一人の自由なる政府とも請負業者とも関係なき独立の建築家に委託して遂行せしめたる為に、此の建築工事が私的建築の場合と殆ど同様廉価にしてしかも良く竣工したといふ事実であります。此の大工事の建築組合として市長リエーゲル博士の計画に係はる大規模の組合住宅が建築家ワグナー氏及び他の独立の建築家の手に依りて遂行されたものです。

斯様な実例の我々に与ふる教訓は畢竟大事業といふものが多数の意見の集合や折衷で生れるものでなくて統一ある個人的仕事であるといふことです。以上記述した所により建築上の問題の内でも通常雑誌などで見られぬ従つて一度は書かれねばならぬ筈の事柄を概ね尽したつもりです。私の言はんと欲した重なる点を再び総括すれば洋服を作るなら早く洋服屋に注文するがよろしい。自分で作つたり医師に頼んだり出来ぬ。同様に住宅や、学校や、病院等を作るなら早く名声あり経験ある建築家に依頼すべきであるといふにあります。誰しも門外漢が自分の専門に喙を容れることを好まぬものです。我々建築家とてもそれが大工や左官屋、建具屋たると、商人、教師、組合住宅の委員たるを問はず、何でも我々より余計知っている様な顔をされては堪ったものではありません。建築問題を解決するは建築家に一任せよ 自ら解決せんとする勿れ。之が此の一篇の主題に外ならないのであります。(終)

本稿ではヒンデルの経歴を中心に報告した。昭和前期の札幌の建築界に登場しながら、ほとんど忘れられていた建築家ヒンデル像及びその広範な作品活動が、多少とも浮き彫りにされたものと考え。年代不明の故に年譜に掲載できなかった作品も含めて、作品の詳細については今後の課題としたい。

註 記

- 1) 1899. 5. 5 —. 1923年来道し、以後設計活動を続けている。田上建築制作事務所所長。
- 2) 1909 —. ヒンデルの先妻の子息である。1928年より'30年にかけて、上智大学の設計・監理に従事したが、父ヒンデルと暮したのは在日の1年間だけであったという。チューリッヒ在。
- 3) 1897. 6.25 —. 1925年より'32年にかけて、北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在勤。チューリッヒ

在。

- 4) 角 幸博, 越野 武:『建築家マックス・ヒンデル-1』日本建築学会北海道支部研究報告集, No. 45, 1976.
- 5) ハンス・ヒンデル氏の書簡 1976 年 3 月 13 日付では単に, *Bauzeichnerlehre bei Schmid & Rosset in Chilon und bei Bischof & Weidele in Zürich.* とあるので, 個人名か会社名かは不明である。
- 6) ハンス・ヒンデル氏の書簡 1976 年 3 月 13 日付。
- 7) 同 上
- 8) 同 上
- 9) 同 上
- 10) 『ヘルヴェチアヒュッテの建設』(山とスキー 第 79 号) では, 「世界大戦に奥国士官として従軍し負傷…」とあるが, ここでは前掲 6) によった。
- 11) 前掲 6) に同じ。
- 12) 山崎春雄: 山とスキー, 1928, 第 78 号, p. 241.
- 13) 田上義也氏談。
- 14) 1881.10. 4 — 1925. 1.29。1908 年より '25 年まで, 北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在勤。
- 15) 柳福子氏の書簡 1976 年 3 月 5 日付。
- 16) 北星女学校寄宿舎設計図には, 「札幌市東光園門イ家建築家ヒンデル」の印があることからヒンデル自身の命名か。
- 17) 北海タイムス, 1925.10.30 — 31. 『雪國に相應しい新しい建築』。
- 18) ハンス・ヒンデル氏所蔵の写真の裏に書かれていたヒンデル自筆の文による。
- 19) 前掲 15) に同じ。
- 20) 北海タイムス, 1925.12.13 — 20。
- 21) 前掲 7) に同じ。
- 22) 同 上
- 23) 大野精七氏談。
- 24) 日本基督教会札幌北一条教会役員, 井口政次郎氏談。
- 25) 山崎春雄: 山とスキー, 1928, 第 78 号 p. 240.
- 26) 前掲 12) に同じ。
- 27) アーノルド・グブラー氏の書簡 1976 年 3 月 14 日付。
- 28) 前掲 6) に同じ。
- 29) 北海道大学所蔵の新聞や, 北海道庁行政資料室所蔵の新聞には, (四) の記事は掲載されていない。